（第3種郵便物認可）

読売俳壇

矢島渚男 選

くつきりと山並の見え紙を干す
宝塚市　広田　祝世

【評】寒気に澄んだ山脈を背景に漉き上がった和紙が干されている。紙漉きの仕事は緻密で根気が要る。山には雪が来ているであろう。

人類に想像せよとレノンの忌
高山市　直井　照男

【評】十二月八日は高齢者には日米開戦の日だが、若者にはレノンの忌として詠われることが多くなった。彼はビートルズの中心でこの日暗殺された。歌は世につれだ。イマジン（想像せよ）は代表曲の一つ。戦争と暗殺は、同次元だ。

襟巻を目まで引き上げ蕎麦屋出る
土浦市　平佐　悦子

【評】動作そのもので、男性か、と思いきや、女性だった。巧い。

冬の鵙鳴くか俺も昭和の不発弾
東京都　大久保昌二

丈夫なら長生きもよし冬の蠅
長野県　村田　実

妻がいて我あり勤労感謝の日
羽生市　岡村　実

濁りそめしより氷紋の汽車の窓
札幌市　村上　紀夫

餌探し柵倒し来る猪数多
神戸市　高橋　和郎

やせ細る秋刀魚優劣なく並ぶ
大和市　高橋　敦子

髪うすき頭の並ぶ柚子湯かな
神奈川県　中島やさか

高野ムツオ 選

初恋の少女に老いて賀状書く
町田市　枝沢　聖文

【評】同じように年老いた初恋の人に賀状をしたためているとも鑑賞できるが、心の中に生きる少女に届くはずのない賀状を書いていると解したい。その方がロマンが広がる。

息白く語る涙も拭はずに
香川県　福家　市子

【評】何があったのだろう。よほど悲しいことに違いない。涙の顔を上げて訴えているのは少女もしくは少年。白息が炎のように熱い。

短日や裏返しても砂時計
日立市　菊池　風峰

【評】砂時計は逆さにしても同じ砂時計。だが、砂がこぼす時間はもう二度とやってくることのない瞬間の連続。短日の今日もまた同じ。

一村の雪一枚に暮れにけり
三条市　星野　愛

あちこちのポケットにあるマスクかな
宇部市　伊藤　文策

老いてより見えてくるもの冬銀河
茅ヶ崎市　清水　呑舟

村ひとつ冬将軍へ明け渡す
さいたま市　大沢　游子

息白くして先生に口ごたへ
川崎市　折戸　洋

冬晴のかなたに飢ゑと砲弾と
小田原市　北見　鳩彦

狛犬の足の踏ん張り冬ざるる
白河市　円谷　淑子

正木ゆう子 選

外はカリッ中はもつちり冬ごもり
大阪市　大塚　俊雄

【評】上五中七は、美味しさを表す決まり文句。しかし食物は出ていないので、ここでは冬籠というものを形容していると読める。外はカリッ中はもっちりの冬籠。案外納得。

冬蜂につく幼な児の笑ひ声
対馬市　神宮　斉之

【評】言葉の使い方として、こちらも「つく」が独特。くっ付くでもなく憑くでもなく。後ろにつく？解釈に迷いつつも、惹かれる句である。

点と線交わるところオリオン座
東京都　土屋ちさと

【評】これも言葉の妙。星座は点である星を線で結んだもの。点と線が「交わる」とはやや意味不明ながら、こう言われると、不思議に面白い。

どつしりと白菜ゆるみなく結球
高松市　入田　葉子

歩めども彼方や浜の夕焚火
東大和市　板坂　寿一

冬の日や耳透き通るハムスター
松江市　三方　元

猫じゃらしってどれですかと下校の子
東京都　松永　京子

炬燵から出られぬ理由を探すなり
入間市　豊泉　繁雄

座布団と椅子に分かれてお取越
神戸市　田代　真一

赤ちゃんは赤ちゃんを知り春を待つ
名古屋市　平田　秀

小澤實 選

コッペパン一箱を置く夜学子へ
神戸市　吉野　勝子

【評】夜学生の給食に出すためのコッペパンが一箱、夜学に届いているというのだ。夕暮も、はや暗くなっている頃であろうか。パンの匂いもただよっているようである。

寝ることが一番勤労感謝の日
土浦市　今泉　準一

【評】勤労感謝の日であるが、誰かに感謝されるよりも、ただただ寝てすごすのが一番というのである。日頃の激務が想像されるところだ。

剣にペン服せし時代開戦日
八王子市　徳永　松雄

【評】対米英戦の開戦日、十二月八日に、その頃の時代を思う。当時は文官よりも武官が幅をきかせていた。そんな時代がまた来るかも。

大根煮箸割り入れてふーと吹き
茅ヶ崎市　大山　凡也

海鼠腸の長ければ起ち取り頒つ
名古屋市　可知　豊親

秋田犬の無垢な眼と会ふ落葉時
横浜市　三上　光子

老いてなほ鰰ぶりこ噛み鳴らす
秋田市　松井　憲一

干芋茎の灰汁ぬく熱湯にひたし
横浜市　我妻　幸男

やき鳥の重き煙や煽ぐ音
前橋市　平林　始

調味料買ひ置くことも年用意
松山市　久保　栞

シアターの座席図を見れば蝶々の舞う如く二席ずつ売れており
東京都　富見井高志

【評】映画館や劇場で、座席表を見て購入する場面。売れた席が色分けなどで分かるのだろう。二人連れなら、並びの席を、なるべく周囲とは離して買う。その結果、埋まった座席表が「蝶々の舞う如く」見えた。形状だけでなく、ペアで見る人たちのウキウキした心までもが捉えられて秀逸な比喩だ。（俵万智）

年間賞　短歌 ②

フーフーしてパパの手動く児の口へ能登震災の避難所の中
あきる野市　大西　国子

【評】能登や宮崎での震災、そして南海トラフ地震臨時情報が続くなど、昨年は私たちの誰もが被災者になりうると実感した一年でした。避難所で懸命に育児を続けるパパの姿と、口を動かす小さな赤子の生命を活写したこの歌はまさに、多彩な支援の必要性を世間に訴える一首でしょう。（黒瀬珂瀾）

題字デザイン・イラスト　福田美蘭